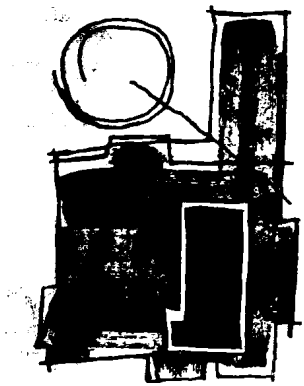
日本ミステリ・シリーズ

7

移 行 死 体

日影丈吉



著者略歴

本名　片岡受安　明治41年生　アテネフランセ卒
昭和30年度日本探偵作家クラブ賞受賞
探偵作家，飜訳家，日本探偵作家クラブ員
現住所　東京都品川区西大崎4の774
主著書
「非常階段」（講談社刊）
「真赤な子犬」（桃源社刊）
「女の家」（東都書房刊）
主訳書
「黄色い部屋」「黒衣夫人の香り」ガストン・ルルツ
「死者の中から」ボアロー&ナルスジャック
「娼婦の時」ジョルジュ・シムノン（以上早川書房刊）

第七回配本　定価三四〇円

移行死体
日本ミステリ・シリーズ
第七巻

昭和三八年一月二〇日　印刷
昭和三八年一月三一日　発行

著者　日影丈吉
発行者　早川清
印刷者　堀内文治郎

発行所　早川書房
東京都千代田区神田多町二〜二
電話　東京（291）0798・1680・3824（編集）
3662〜8

用紙・四国製紙KK／クロース・日本クロースKK／印刷・KK堀内印刷／製本・堅省堂

移行死体

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

目次

第一部　都心……五
第二部　離島……一八一
作者あとがき……二七七

箱・カット　上泉秀俊

第一部　都心

I

宇部は片手で吊革につかまり、片手で新聞を眼の高さに支えていた。国電の中では、誰でもやるポーズだ。いまはラッシュ時でもないのに、車内はかなり混んでいる。過剰人口のせいか。座席はほとんど塞がり、窓に面して立つ人が、荒磯の防風林のように、でこぼこの列をつくっている。が、午後のこの時刻の電車は、ゆとりと時間を感じさせながら、ずっしり重い音を立てて走る。高架の上の外光が、立木や生垣のようにむっつりした乗客達を、灰色にてらしだし、車内を影っぽくしている。街の空は紫色に浅く曇り、その裾に紅い広告気球が浮かんでいるのを、動かない眼で見ている人もある。だが、宇部は周囲のいっさいに無関心で、新聞に読みふけっているように見える。

事実はそれほどでもなかった。彼と紙面のあいだに立ちふさがっている一種の眠気を押しのけてまで、忠実に読む義務はなかったのだ。宇部がみはった眼で、捕捉しにくい非協力的な記事にすがりついているのは、空腹との戦いである。眼をあいてないと立っていられない。宇部はときどき眼をはなして窓の外をのぞく。外の景色は下車駅の近づいたのを知らせる。宇部はさっき眼

をあげたとき眼についた広告気球を眼で捜す。それはもう視界を去り、次のアドバルーンが如才なく見えて来る。今度は黄色だ。まるで子供の国のパノラマみたいに迎合的だ。環状線に沿って無数といってよいほど百貨店がある。気球をあげるのはデパートばかりでもない。遊園地、動物園、トルコ風呂、政党本部までがスローガンを空に掲げる。天を衝く意気が春の雲に懐柔され、だらりとしている。現に、彼が目下世話になっている、甘利民也のアトリエのあるビルまでが、気球をあげる。

もう気にする必要もないようなものだが、宇部は半月前まで、バイト仲間でアゲ屋という、気球あげアルバイトをやっていた。気球をあげ、縄梯子に縫いつけた切抜きの広告文字が、よじれないように見張っている。おおむねデパートの屋上をぶらついたり、日向ぼっこをしていれば一日がすむから、あまり骨の折れる仕事とはいえない。が、彼はふいに何をするのも厭でたまらなくなり、その気分が高所恐怖を誘発した——と彼は考えた——ために、折角時機にむかって来たバイトを放棄して困窮をえらんだ。もっとも困窮はいつも彼につきまとっている。いまさら気球を仰ぎ見て惜しむほどの気持にもなれない。

空はまだ紫色に濁っていて、黄色い気球とは型どおりの配色だが、その一角が透けて鋭い青眼がのぞき、磨いた銅(あかがね)のような喉のかわく色の斜光がさしている。泰西名画というのに、よくあるやつだ。宇部はすこし不安になる。宇部はときどき、空から何か落下して来て、地上に壊滅的打撃を与えそうな気持に襲われる。大陸間弾道弾か、巨大な寒天のかたまりの中に培養された無数の細菌か。いや、もっとわけのわからないものらしいだけに、その不安は多少滑稽でもある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

宇部は下宿代を八カ月ためて、ちょうど半月前に着のみ着のままアパートを追いだされた。管理人は彼の所有物を全部おさえ、部屋の鍵をとりあげた。全部というにはすこしお粗末で、煎餅蒲団一、綿が四角い袋の中を移動する掛蒲団一、太平洋戦争時代の軍隊毛布一、知合いの質屋から二百円で買ったベンベルグの丹前。そんなものに未練はなかったが、追いだされてから三日目に、彼は路上から割栗石のかけらを拾って、アパートの二階に忍びこみ、やわなベニヤ板のドアの鍵をぶちこわして、毛布一枚だけ持ちだした。彼は甘利の命令でそれをやった。当分おいてやるから、夜具を持って来いと甘利にいわれ、だが、彼には毛布一枚ぐらいのところが適当に思えたのだ。

甘利は大学の二年先輩だ。経済を出て証券会社に入ったが、すぐにやめてしまい、小金井の方にある私立の美術学校に通いだした。一時でも就職したのは、オヤジさんに義理を立てたのだという。彼の家系は三流の資本家だ。祖父はパージに引っかかった元植民地興発会社の重役で、父親は現在、大水産会社の専務のひとりだ。

彼はもとから画家志望だったといっているが、宇部にはぴんと来ないものがある。甘利に造形的な才能があるとは思えないし、縁なし眼鏡をかけた冷酷そうに神経の尖ったような顔は、画家のものとは思えない。画家がどんな顔をしていなければならないか、もちろん宇部にはいえないが、すくなくとも甘利の顔は向きではない。こんな顔をした男が非実利的な傾向に出精できるとすれば、それは奇蹟のようなものである。だが、卑俗な奇蹟は、職業選択の自由がみとめられる社会だからこそ許される。他にも、ばかげた社会的奇蹟は、いくらもある。

甘利は一年ばかりで美校をやめ、神田川べりの高台に建つ小さなビルの五階に、アトリエを持った。宇部が甘利の別の友人から、前に聞いた話では、甘利は権利金二十万円はらって、そのコンクリートの横穴みたいな何もない部屋を背負わされたのだ。甘利はそこへ入ってから四日目に、追いたてを食った。つまり彼は詐欺にひっかかっていた。

そのビルの四、五階を借りていた出版社が倒産して、出資者でもあったビルの持主鳥山に権利を回収されてしまった。ところが、同社の立退き寸前、編集部長をやっていた甘利の知合いの男が、彼に五階の権利なるものを譲渡して逃亡したというわけだ。

甘利にそんな抜けたところがあるというのは意外なくらいで——事実だから仕方がないとはいうものの——やはり、騙されてただ泣寝入りするような男でない証拠には、甘利は持主の鳥山に、どう渡りをつけたのか、現に、そこに居すわっている。いま、また追い立てを食ってはいるが、それはその後、家賃を溜めたからで、権利金の問題を彼がねばって解決したという噂は一応ほんとうらしい。

権利とはどういうことなのか、法津知識皆無にひとしい宇部には、よくわからないし、居候の彼には居住権にまでクチバシをはさむ資格はないが、今度の追いたてに対処する見込みがあるかどうか、きわめて不安な状況である。甘利には室代をはらう気はないらしく、あっても実際に支払いは不可能らしい。

甘利がビルを追いだされると、宇部も当然また、ねぐらを失う。はじめから甘利との共存に安定性を認めていたわけではないから、恨みがましい気にはならないが、こまることはこまる。宇

部は甘利と特に親しかったわけではない。アパートを追われて、友達まわりをしているうちに、偶然、甘利のアトリエに顔を出すと、いたければいてもいいぜ、ということになったのだ。

そのかわり、自由販売の米は食わせられないから、移動証明を取って来いと、いわれた。そんな大きなことをいったくせに、甘利は飯の心配をしてくれたことはない。五階のアトリエにもぐっている限り、宇部は飢えと手を切れなかった。だから、居候ではあるが食客ではないと、へんな修辞にこだわりたくもなる。邪推かも知れないが、甘利はどうやら宇部の居住権を、居すわり態勢の強化に利用しようとしているらしくもある。もっとも甘利も多少は、いつも飢えていた。

そのくせ、感心なことに甘利はいつも絵を描いている。制作に金がかかるせいか、引越して来た時、担ぎこんだ進駐軍払い下げの鉄のベッドと、机、椅子、本棚の他は、あいかわらず何もない。むきだしのコンクリートの床に、絵具が鳥の糞のようについた画架(イーゼル)を立て、余分のマットレスが一枚、モデル台のかわりにほうりだしてあって、さしあたり宇部はそれを寝床に借りている。

いくら小さなビルだといっても、五階のフロア全部を占領しているのだから、物のおかれているのは片隅にすぎない。焼けビルに乞食が住んでると思えば、いちばん手っとりばやく状況がわかるかも知れない。わずかに焼けビルよりもまさるのは、窓ガラスがはまっていることだ。といっても、戦前に建ったビルとはいえ、窓は大きくとってあるから、寒いのはあまり変りがない。去年の夏、甘利を訪ねた時、彼は素人くさいモデルを、いま宇部が寝床にしているマットレスの上に転がして、ヌードを描いていた。が、目下はそれどころではなく、自分たちのあたる火の設

備もない。最初に泊った晩、あまり寒くて寝つかれなかったので、宇部はいってみた。
「煉炭を買う金もないのかね。バケツに砂をつめて、煉炭火鉢をつくることなら、知ってるけど――」
「生意気いうな。おれは最低の耐乏生活を実験してるんだ。寒かったら起きて、飛んだり跳ねたりしてみろ。おれのアトリエは運動には適してる。バレーの稽古場にだってなるほど広いんだからな」
「エサが腹に入れてあれば、からだも動かせるがね――」
「ぜいたくいうな。寝ちまえ」
と、甘利は怒ったように、いった。
寒いのは我慢できたが、四、五日たってから、宇部は坂の下の建築現場へ板きれをひろいに行った。甘利は耐乏生活などといったくせに、朝がた室内がひどく冷えて来ると、宇部の寝床を襲ったからだ。合成樹脂の箆のような、固くてしなしなする手足で、宇部に抱きつき、
「おまえは痩せてて食い物がわるいから、あたたかくないが、ひとりで寝るよりは、いくらかでもマシだ」
などと、いった。ぞっとするほど気持がわるかった。つまり、彼の襲撃を避けるために、焚きもの集めをはじめたのだ。木地の見える木などは拾えなかった。が、泥の衣をかぶった板きれでも、タールが沁みていたりして、けっこう燃えた。それを夜ふけに二度ぐらいに分けて、コンクリの床の上で焚くのだ。ますますルンペン生活に似て来た。だが、宇部には、外で夜をあかした

経験もある。どんな場所でも建物の中は、外とは比較にならぬくらい温かいのを知っているから、出て行く気はなかった。この季節に外で寝る生活にくらべたら、彼はまだまだ上等な暮らしをしていると思えた。

だが、焚火も長続きしなかった。どうして気がついたのか、ビルの持主の鳥山秀臣が嗅ぎつけ、甘利はひどく文句をいわれたそうだ。

「警察にいいつけて、ただちに追いたてを食わすというんだ。コンクリの床が燃えるわけでもないのに、ケチくさい奴だよ」

「そういう問題は警察より、消防署のあつかいじゃないのかね」

「どっちでもいい。別に焚火をやめる気はないからな。あいかわらず、焚きものの供給をたのむぜ」

と、甘利はいった。

だが、その方がダメになったのだ。宇部は役に立たない廃物を集めていたのだから、誰にも損失はかけてないつもりだったが、工事場の資材泥棒とまちがわれたらしく、追いかけられて必死に逃亡した。もうすこしで袋叩きになるところだった。甘利に何といわれても、もう二度とそこへ潜入する気にはなれなかった。宇部がもうイヤだというと、甘利は彼を卑怯者だと思ったらしい。甘利には焚火の味が忘れられないようだ。

「おれは耐乏生活の中に、こんな喜びがあるとは知らなかった」

と、ある晩など、焚火をみつめながら述懐していたくらいだ。出て行け、とはっきりはいわな

いが、甘利に白い眼をされるのは困る。もう寒さも峠を越しているし、甘利の主義主張はとにかくとして、こういう耐乏生活の結果が宇部のために悪いとは、決していえないと彼は思う。ここは前のアパートよりはるかに環境もいいし、一週間いて、ひどい暮らしだったが、宇部は住みつきたくなった。将来の設計もできそうに思えた。

宇部には人間の暮らしに、火のない生活などは想像もできなかったのだが、たしかにその焚火以前の甘利は、火のない生活を実行していた。人類は火をおこすことを覚えて、食物を煮焼きし、それが咀嚼と消化を容易にし脳の活動を発達させた、と自然弁証法の中で、エンゲルスはいっている。が、甘利は彼の祖先が脳の発達過程をすませておいたおかげで、すべての加工食品ですませ、食事に火を使わないでも、馬鹿にならずにすんでいる。甘利は飯も炊かないし、宇部がおどろいたことに湯茶も飲まないで、彼みずからいう野獣の牙を自慢にし、ときどき白い歯をむいてみせる。酒も煙草も飲まない。

つまり、甘利の五階のコンクリート洞窟では、燧石が発明されていた石器時代より以前の、原始生活が営まれていたわけだ。が、一度、くさった堰板の焚火にありつくと、ふいに別の原始的な情熱が燃えだしたらしく、偶然、文明への誘惑者の役を買ってしまった宇部としては、見殺しにするわけにも行かなくなった。そこで今日は、煉炭の調達に出かけたのだ。

久しぶりに学校へ出て、一年下の中守に会ってたのむと、案外あっさり承知してくれた。中守と特に親しくしているわけではないが、彼は気が弱くて、いわゆる突破口的存在なのだ。中守は神田川の対岸に親戚の水道下水工事屋があるといい、そこへ電話をかけてやるから、いつでも取

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo